

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

平成二十八年七月九日(土曜日) 午後六時三十分開演

演目解説 (石川工業高等専門学校准教授 佐々木 香織)

狂言 賞聳(もらいむし)

酒に酔うたびに妻を離縁する聳が、実家に帰った妻を迎えに来て、何かと舅しゅうとの機嫌をうかがいます。禁酒の誓いをして冷たく舅にあしらわれ、とりつく島もありませんが、妻がなくては世帯が成り立たず、幼子も母を探すという殺し文句に、立ち聞きする妻が思わず声をあげ、父の言いつけを破って舅の前へ出てからは、夫婦のよりが戻り、怒る舅を振り切って帰ります。そうなるのは三人も承知で、いつもの失態を繰り返すと思われれます。

能 船弁慶(ふなべんけい)

兄頼朝との不和により都落ちする判官ほうがん(義経) 一行十余人は淀川を船で下り大物の浦へ出ます。ひとまず弁慶(ワキ) 馴染みの宿に休み、弁慶が義経(子方)の許しを得て愛妾静(前シテ)に帰洛を促します。これから先の難路を思えば女人の同行は無理、人口も憚はばかられての判断です。義経自身からも別れの言葉があり、静はようやく納得すると共に、弁慶の策略、義経の心変わりを疑った我が身を恥じ、再会を願って門出の祝宴に白拍子を舞います。一行は船出し静は涙にむせびます(中入)。未練に発たちしぶる義経を励まして、弁慶は船頭に船を出させます。六甲沖で風が変わり、雲行きも怪しく、波が騒ぎ始めます。怪士あやかしが憑ついたと縁起でもないことをいう者(ワキツレ)もあり、船中が動揺するうちに海上には平家一門の幽霊が浮かび出て、平知盛(後シテ)を先頭に嵐と共に義経に襲いかかります。果敢に太刀を構える義経をかばい、弁慶が必死に祈り防いで悪霊を退散させます。(金沢大学人間社会研究域教授 西村 聡)

装束附 前シテ(静) 鬘をつけ、鬘帯をしめ、増又は孫次郎の面をかける。

後シテ(平知盛) 鍬型のついた黒頭をつけ、怪士の面をかける。